

学会企画と本誌投稿数の関係と改善策

草 莉 仁¹

The Promotion of the AESJ Journal Submission by Planning the Annual Meetings

Hitoshi KUSAKARI (Kobe University)

The main symposiums of the AESJ annual meetings have had a tendency toward two biases: first, temporary issues of agricultural and rural policies have been eagerly discussed; second, the senior members aged in their 50s have been dominating the roles of presenters and discussants at these symposiums. These two biases have weakened the strong point of the AESJ, its characteristic of respecting the evidence from a large number of empirical analyses. As a result, low submission rates to *Nogyo Keizai Kenkyu* (JRE) and *JJRE* have not improved yet, and the interest of young members in the symposium has continued to decline. This article points out that the biases have split the current AESJ members into three groups, “policy talk lovers,” “obligation performers,” and “research lovers,” then, the AESJ has got trapped in a fallacy of composition. To resolve the biases, the AESJ planning committee asked young researchers including a government official to make presentations with the support of middle and senior discussants in the two business years of 2012 and 2013.

Key words : planning of annual meetings, journal submission, split, fallacy of composition, externality

1. 報告の目的

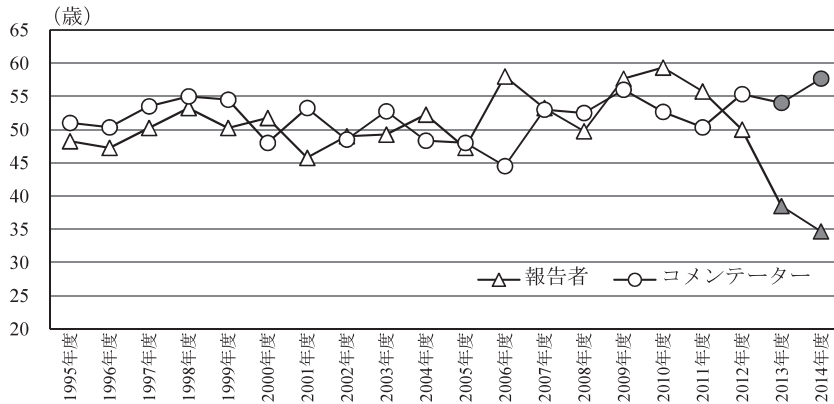
日本農業経済学会（以下、「学会」という場合は日本農業経済学会を指す）が抱える複数の問題の中で、周知の問題は学会の和文誌『農業経済研究』と英文誌JJREへの投稿数が少ないことである。これは今に始まったことではなく、かなり以前からの懸案事項である（註1）。『農業経済研究』とJJREを併せて「本誌」と呼んでいるので、ここではこの問題を、①「本誌投稿数の低迷」問題と呼ぶことにする。この①「本誌投稿数の低迷」は、本誌への投稿数を数えればすぐにわかることであるが、この問題と並行して、もう少し見えにくい問題も同時に進行している。それは大会シンポジウムに対して若手研究者の関心が薄れていることである。ここではこの問題を、②「若手研究者のシン

ポジウム離れ」問題と呼ぶことにする。この②「若手研究者のシンポジウム離れ」の進行が、会員の間での程度の懸念事項として浸透しているのか定かではないが、①「本誌投稿数の低迷」ほどに有名でないことは確かである。このことはすなわち、学会運営に若手の意見が反映されにくいことの現れでもある。

本報告の目的は、学会企画担当の立場から、①「本誌投稿数の低迷」と②「若手研究者のシンポジウム離れ」との関係を検討して、改善策を提示することである。「学会企画担当の立場から」という意味は、①「本誌投稿数の低迷」と②「若手研究者のシンポジウム離れ」の問題が、本誌の審査規程に関わる編集担当、本誌の電子化に関わる情報担当、シンポジウムの企画に関わる企画担当のみならず、学会運営全般に関わる問題であると捉えているためである。すなわち、その中で企画担当にできることを模索することが、本報告の目的である（註2）。

上記の目的のため、ここでは報告内容をできるだけ

¹神戸大学（2012～2013年度 企画担当副会長）
frontier@kobe.u.ac.jp



第1図 大会シンポジウムにおける報告者とコメンテーターの平均年齢

註：横軸の年度は大会年度である。例えば2014年度大会のシンポジウム開催日は2014年3月29日であり、事業年度は2013年度となる。

わかりやすく、簡潔に示したい。そのため、会員の皆さんにとって無礼さまりない表現を使うことになると思う。もっぱら、内容をわかりやすく説明するためであることをご理解いただくとともに、該当する表現を使うことについて、切にお許し願いたい。

2. 学会の現状

2013年度の東京農業大学大会における大会シンポジウムの趣旨説明には、「近年の大会シンポジウムの全体テーマは、政策・制度論や国際化・グローバル化と日本農業などの時事問題が中心であり、1986～2010年度の24回のうち、時事問題が17回を占めている(註3)。これに対して、2000～2001、2011～2012年度の4大会は、日本農業が扱って立つ基礎的条件の普遍性と変容に焦点を当てた中長期的なテーマを扱っている。こうした中で、コメの関税化や農地流動化仮説をめぐる論争のように、学会全体が学派を超えて議論を展開するような、かつての熱気は沈静化しつつある。コメの関税化や農地流動化の論争を支えたのは豊富な実証分析であり、時事問題であれ基礎的条件の検討であれ、実証による批判的検討を重ねてきたことが日本

農業経済学会の特徴であった。しかし、最近はこの学会が誇るべき実証部分が手薄になっており、その意味では閉塞的状况にさしかかっているといえる」と記載されている(註4)。

日本農業経済学会は、大会初日に1つのテーマで全員参加型のシンポジウムを開催することが慣例となっていることもあり、テーマとして政策を含む時事問題が取り上げられやすい。しかし、同じ時事問題を取り扱うにしても、以前とやや異なることは、課題を実証して結論や提言に結びつけるための実証部分が手薄になってきていることである。②「若手研究者のシンポジウム離れ」は、こうした論理実証主義に対する甘さと無関係ではあるまい。

第1図に、今回の大会を含め、過去20年間の大会シンポジウムにおける報告者とコメンテーターの平均年齢を年ごとに示す。1995～2012年度までは、いずれも45～60歳の間に分布している。また、1995～2012年度までのすべての報告者とコメンテーターについて、それぞれの平均年齢を求めると、報告者が51.2歳、コメンテーターが51.9歳となり、主に50歳前後の会員が大会シンポジウムを担ってきたことがわ

(註1) 例えば、筆者が『農業経済研究』の編集委員を務めた1999～2000年度、あるいはJJREの編集委員を務めた2008～2011年度も同様であった。

(註2) 企画委員は冬木勝仁氏、清水みゆき氏、伊東正一氏と筆者が務め、任期半ばではあったが、2013年4月より伊東正一氏が福田晋氏に交代した。当初より編集担当との連携を念頭に置いた。

(註3) 本文に示す年度はすべて大会年度であり、事業年度の翌年である。例えば、2010年度大会のシンポジウム開催日は2010年3月27日であり、事業年度は2009年度となる。1991年度は国際農業経済学会のため、大会シンポジウムは開催されていない。

(註4) 「2013年度日本農業経済学会大会のお知らせ」より抜粋。企画委員会から会員に向けたメッセージである。

かる（註5）。

3. 分断された3つのグループ

日本農業経済学会の現状を端的に表現するならば、次の3つのグループに分断された集まりであると考えられる。はじめに述べたように、失礼を顧みずに、わかりやすさを優先して各グループの特徴を述べるならば、以下のとおりである。

1) 政策談議好きグループ

このグループは、シンポジウムの報告者（1995～2012年度では平均年齢51.2歳）とコメンテーター（同期間では平均年齢51.9歳）を中心とした中堅+シニア研究者からなるグループであり、どちらかといえば実証分析よりも達観的な時事問題評価が多い。大会シンポジウムに強い関心を持つ一方、本誌の投稿には関心がない。

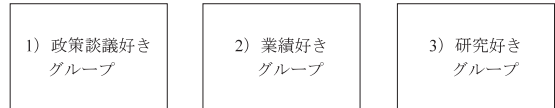
2) 業績好きグループ

このグループの主な関心事は、所属機関で義務化された業績数を満たすことであり、学会はそのためにある。若手と中堅研究者を中心としたグループであり、「個別報告」と『日本農業経済学会論文集』（以下、『論文集』）の投稿が主な目的である。大会シンポジウムには関心が薄く、本誌の投稿には関心がない。

3) 研究好きグループ

このグループは、研究を公表する機会として本誌の投稿に関心がある。主に若手研究者を中心としたグループであり、実証部分が手薄な大会シンポジウムは論文作成のヒントにならないため関心がない（註6）。また、投稿原稿が本誌へ掲載されても1) 政策談議好きグループと2) 業績好きグループは読まないのので、反響は3) 研究好きグループ内に限定される傾向にある。そのため、本誌の電子化には関心が強い。

端的に述べれば、学会の現状は第2図や表のような3つのグループに分断されている。ここで「分断」の意味は、3つのグループ間で議論や交流がないということである。もちろん、これは現状を端的に表現した「モデル」であって、すべての会員がこのモデルに当てはまると主張するつもりはない。同時に、3つのグループを「善か悪か」で評価することも適切ではない。例えば、以前と比べて研究機関の業績主義が強まった



第2図 分断された3つのグループ

表 3つのグループの特徴

	政策談議好き グループ	業績好き グループ	研究好き グループ
シンポジウム	○	×	×
論文集	×	○	×
本誌	×	×	○
主な年齢層	中堅+シニア	若手+中堅	主に若手

結果、その流れにもっとも効率的に対応しているのが2) 業績好きグループであるという評価も可能である。その帰結が『論文集』の肥大化につながっていることも、また周知の事実である。

ただし、分断された3つのグループのそれぞれが、現状を所与として効率的に行動すれば、グループ間の分断はさらに強まり、学会全体としてのパフォーマンスは低下していく。すなわち、各グループ内の合理的行動が、学会全体の合理的行動に結びつかないという意味で、「合成の誤謬」が生じている。現状を所与として、現状に甘んじたままでは「合成の誤謬」は解消しないことを、会員と役員は認識すべきである。本報告の目的である①「本誌投稿数の低迷」と②「若手研究者のシンポジウム離れ」との関係、およびその改善策を探ることに議論を限定すれば、大会の運営において、本誌の投稿に熱心な研究者が冷遇されていることも、分断を助長する要因の1つであろう。

4. 改善の試み

1) 政策談議好きグループによる政策論議や時事問題評価の有用性を否定するつもりはまったくないが、大会シンポジウムの多くが時事問題に費やされると同時に、それらが50歳前後の報告者とコメンテーターで担われ続けている状況は、やはりバランスを欠いているのではないかと。①本誌投稿数の低迷と②若手研究者のシンポジウム離れの背景には、こうした企画の傾

(註5) 報告者とコメンテーターの人数は毎年異なるので、1995～2012年までのすべての報告者とコメンテーターの平均年齢は、各年の平均年齢を平均した値ではなく、該当期間における全報告者と全コメンテーターそれぞれの平均年齢である。

(註6) 1995～2014年の20年間において、本誌（和文誌）論文で引用されたシンポジウム報告論文は4報告のみである。

斜が潜んでいると考えられる。特に、実証部分が手薄になっている政策論議が、実際の政策に活かされにくくなっている昨今の状況が、学会の求心力を低下させる一因となっていることも考慮すべきであろう。

上記の状況に対する改善の試みとして、2013年度と2014年度大会における2年間のシンポジウムでは、本誌に掲載された実績のある3)研究好きグループの若手研究者に、実証分析に根ざした報告を依頼した。同時に、報告者として現職の若手行政官にも加わってもらった。これが、①本誌投稿数の低迷と②若手研究者のシンポジウム離れに対する企画担当の立場からの1つの改善策である。ただし、若手であるがゆえの視野の狭さは否めないの、1)中堅+シニア研究者に、従来のコメンテーターの役割を超えて、討論者としてのサポートをお願いした。報告者と同様、討論者としても、農水省OBである現役研究者に加わってもらった。その結果、2013~2014年度の2年間における報告者の平均年齢は36.9歳、討論者の平均年齢は55.8歳となった。

3) 若手研究者が大会シンポジウムで報告すること

要旨：日本農業経済学会の大会シンポジウムは、過去の24回のうち、時事問題が17回を占め、平均して50歳前後の報告者とコメンテーターで担われてきた。その結果、実証による批判的検討を重ねてきた学会の特徴が、しだいに希薄化した。こうした状況の中で、従来からの懸案である「本誌投稿数の低迷」は改善されず、新たに「若手研究者のシンポジウム離れ」が進行している。本報告では、学会が1)政策談議好きグループ、2)業績好きグループ、3)研究好きグループの3つに分断され、「合成の誤謬」が生じている現状を指摘し、若手の研究者・行政担当者を報告者に、中堅・シニア研究者を討論者に起用することで、企画担当の立場から改善策を提示した。

キーワード：学会企画、本誌投稿数、分断、合成の誤謬、外部性

により、これまで3)若手研究者グループ内で閉塞的に読まれていた自身の研究を学会参加者に知ってもらう機会が与えられると同時に、報告論文として本誌に掲載されるため、同年代の若手研究者にとっての刺激になることが期待される。その際、1)政策談議好きグループと2)業績好きグループの、特に中堅+シニア研究者の方々には、学会を通じて若手を育てるという懐の深さを示していただきたい。本来、学問の世界には学派の壁を越えた外部性が存在しているはずであり、それが「合成の誤謬」を解消するための、1つの有力な手立てとなるからである。

はじめに述べたように、本報告の目的は、学会運営全般に関わる問題の中で、学会企画担当の立場から、①「本誌投稿数の低迷」と②「若手研究者のシンポジウム離れ」との関係を検討して、改善策を提示することにあった。学会の改革は緒に就いたばかりであり、本報告は企画担当の立場から改善策の一例を示したに過ぎないが、今後の継続的改革に向けて、多少なりともヒントになれば、企画委員会として幸いである。